

「呉空襲の体験から」

私が5歳の時でした。軍都・呉は昭和19年からたびたび敵機の襲撃を受けるようになりました。一番怖かったのはB29の不気味な低いエンジン音でした。空全体をB29の大群が覆いつくし、けたたましく鳴り響く空襲警報。

「(寄稿者のお名前)ちゃん、起きて！」

昭和20年7月1日の深夜、緊迫した母の声でたたき起こされました。

あわてて外に出たらB29の大群。

次から次へと降ってくる焼夷弾。

母に手を引かれ、たくさんの人と爆弾を避けながら必死の思いで逃げていたら、母とはぐれてしまいました。

「何をしているんね」「よそのおばちゃんについて行ったらだめよ」と母の声。

やっと大きな青葉の茂った木の下にたどり着きました。

街は一面焼野原。足元には折り重なる遺体の数々。こんなむごい光景を見ても、不思議と涙は出ませんでした。

「ああ、生きていたんだ」と思ったことをはっきりと覚えています。

おばさんが「(寄稿者のお名前)ちゃん、名古屋へ疎開しようや」と行っただが、母は「里に帰ろうや」と言い合いになり、母の里に疎開することになりました。

今、世界でも戦争が繰り返され、多くの人々が殺されています。

罪のない人々を殺し、幸せを奪う、人権侵害の最大の暴力は戦争です。

もう二度と戦争してはなりません。

呉空襲で生き残った体験を次の世代へ伝えていくのが私の使命だと思います。